

1. 教育の責任

主な担当は、保育士資格および幼稚園教諭二種免許取得に関わる「保育の内容・方法の理解に関する科目」に関する科目である。

担当科目名を以下に示す。

【保育の内容・方法の理解に関する科目】

- ・ 「保育の展開技術Ⅰ」：演習、1年前期
- ・ 「子どもの生活と遊び発表演習Ⅰ」：演習、2年前期
- ・ 「子どもの生活と音楽遊びⅡ」：演習、2年前期
- ・ 「保育の展開技術Ⅱ」：演習、2年後期
- ・ 「子どもの生活と遊び発表演習Ⅱ」：演習、2年後期
- ・ 「保育と青森（表現）」：講義、1年前期
- ・ 「保育実践と青森（表現）」：演習、1年後期

【教職実践に関する科目】

- ・ 「教職実践演習」：演習、2年後期

【総合演習に関する科目】

- ・ 「特別研究」：演習、2年通

【教養科目（人間の理解）】

- ・ 「人間と芸術」：講義、前期

本学科の音楽表現に関わる科目は、基礎力養成期に位置付けられた1年次科目から応用実践力育成期に位置付けられた2年次科目まで、「到達目標」・「授業内容」・「課題」・「評価基準」について科目間で密接に関連させて構成することによって学習成果を高める工夫をしている。実技系演習科目は複数の非常勤講師と協働して授業を実施する必要があるため、学生の習熟度と進度を公正に確認するチェックシートを用いて指導にあっている。また、教授内容についても共通理解が得られるように教員間で話し合いを密に行っている。「子どもの生活と遊び発表演習Ⅰ」、「子どもの生活と遊び発表演習Ⅱ」、「保育と青森（表現）」、「保育実践と青森（表現）」は、他分野の教員とのオムニバス形式の授業展開となるが、共通の評価表を用いて評価項目や評価基準を明確に設定することで、総合的かつ多面的な評価ができるように努めている。

2022年度より学科長として学科FD活動の企画・運営し、学科の教育力の向上に努めている。

2022年度は学科の教育目的を新しく定め、学科の教育内容の質の向上と明確化を目指している。

2. 教育の理念と目的

幼児保育学科の教育目的：

幼児保育学科は、子どもの育ちと社会の幸福を支える専門的職業人として保育者を位置づけ、「自他に対する人間愛を土台として、より善く生きようとする子どもとその保護者の成長を支え社会に貢献する保育者」を育成することを目的とします。

新しく定められた幼児保育学科の教育目的は、建学の精神「愛あれ、知恵あれ、真実あれ」に基づいて掲

げられている。教育目的では、保育者を子どもと社会の幸福を支える専門的職業人として位置づけているが、中間部にある「自」という言葉には、保育者の献身的な部分を超えて、「保育を職業としながら生きていく人間として」という意味や「幸福を求めて人生を歩む一人の人間として」という意味が込められている。また、「他」という言葉にも、「幸福を求めて生きる子ども」、「幸福を求めて生きる保護者」という対象の他に、「幸福を求めて生きる他の人々」という広い意味を含ませている。建学の精神の「愛あれ」に紐づく「人間愛」という言葉は様々な解釈が可能となるが、「思いやり」、「行動力」、「寛容」、「モラル」、「仁慈」、「ユーモア」、「笑い」等、保育者としての愛に留まらないもの、人が生きるために必要とされる最もわかりやすくあたたかみのある愛を具現化する言葉として「人間愛」を意味づけている。「より善く生きる」という言葉は、魂をより優れた善なるものへとするという「ソクラテスの弁明」に近い捉え方をしている。この「より善く生きる」という言葉に、建学の精神の「知恵あれ、真実あれ」の意味を含有するものとした。

学生自身が、短期大学で見つけた「問い」と私たちの「問い」をさまざまな形で共有し、幸福を感じながら生涯学び続ける志を持った保育者を育成していきたい。

3. 教育の方法

1) ピアニストとしての経験・演奏技術を活かした指導

保育者養成課程（短期大学）において短期間で演奏技術を習得し、音楽的な感覚を豊かにしていくために重要なことは、初期段階において普遍的な技術・技能・を習得した上で、保育の専門性にマッチした教材の活用や指導法に転換・応用していくことだと考えている。複数の教則本の学修段階毎の目的や練習内容・方法を熟知していれば、そのコアな部分（技術、奏法、表現方法など）をよりシンプルにわかりやすく「子どもの歌」に関連付けて指導することが可能である。また、自らのピアニストとしての経験から、ピアノの音作りの楽しさ、演奏技術の面白さ等を実践的に伝えている。令和3年度から、ピアノの自主学習のためのレクチャー動画（ICT教育）を課題の予習・復習に活用している。授業効果、カワイピアノグレードの取得状況も継続的に向上している。

2) 表現分野における「気づく力」、「構成する力」を育む工夫

他領域との関連はもちろん、表現分野には造形活動、身体活動、音楽活動のほか、子どもの様々な活動が融合されている。領域「表現」に関する授業では、自然環境をテーマにした表現活動や、音で作るお話の世界など、子どもたちの周りにある音、言葉、絵などを組み合わせた創作活動を授業に取り入れている。学生が、身近にある様々な表現の素材に気づき、表現の世界の奥深さ、多様性、多面性を知ることによって、子どもの豊かな感性を育むための活動を構成・展開していくための基礎力を育んでいる。

3) 「表現者」となる場の創出

2年間の表現活動の集大成として、2年生全員がオリジナルのミュージカルの制作に取り組んでいる。制作活動は、2年前期開講「子どもの生活と遊び発表演習Ⅰ」と2年後期開講「子どもの生活と遊び発表演習Ⅱ」の授業内で実施している。制作したミュージカルは、青森市内の会場で毎年開催され、長年、地域の文化活動として親しまれている。学生は、キャスト・造形・音楽の3分野に分かれて制作活動にあたる。ミュージカルの題材は可能な限り児童文学から選ぶようにし、選ぶ過程からも様々な文学作品の魅力に気づく機会としている。学生たちは、作品のテーマは何か、自分たちは観客に何を伝えたいのか、そのためには場面をどのように構成してリメイクしていくか等の検討をしながらシナリオ制作に取り組む。私自身はその過程を見守りながら助言をするとともに、ミュージカル作品に導入される音楽作品（作詞、作曲、編曲など）を提供している。シナリオ制作、分野練習、合同練習、会場練習、公演という一連の流れの中で様々な関わりを通して、学生たちは総合的に表現の世界を探究していく。自身が何らかの役割をも

ってステージを創るという経験が、学生たちを「表現者」へと成長させ、その経験が、子どもたちの表現世界を広げていく保育者の実践的な力になることを期待している。

4. 教育の成果・評価

担当する科目の授業改善アンケートの評価結果は、全体平均に比べ良好であった。1年次講義系科目においては問6「自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか」は前年度と比較して向上されていた。音楽表現分野においては、1年生の1週間あたりの平均勉強時間は、30分～1時間(26.3%)、1～2時間(26.1%)、2～3時間(28.3%)、3時間以上(13.0%)となり、全体的には昨年と同様に熱心に取り組んでもらえたという結果を得た。2年生前期科目の1週間あたりの時間も、1～2時間(37.0%)、2～3時間(13.0%)、3時間以上(15.2%)となり、2年生も学習意欲をもって勉強に取り組んでいたことがわかった。1年前期の音楽関連科目における成績分布のバランスは、S(38.2%)、A+(18.2%)、A(20.0%)、B+(9.1%)、B(10.9%)、C+(1.8%)となり、昨年と比較すると下位層が減少し、上位層が増加した結果となった。基礎力養成期の授業内容および科目の到達目標の設定から鑑みて、この結果は妥当だと判断している。また、2年生前期の音楽関連科目の成績分布では、S(5.7%)、A+(3.8%)、A(20.8%)、B+(30.2%)、B(26.4.3%)、C+(3.8%)、C(9.4%)という結果となり、昨年と比較すると下位層が減少し、B+の中間層が増加することでバランスのよい成績分布となった。52期生は取得目標としているカワイグレード11級以上合格者数の割合が過去最高値の100%となった。総合型選抜合格者を対象とした入学前ピアノレッスンの効果や初心者対象のグループレッスンの効果が入学後の学習成果の向上に繋がったと考えられる。次年度も引き続き検証し、授業内容の充実、授業効果の向上を目指したい。

5. 今後の目標(改善・努力)

- 1) 2023年度認定絵本土養成講座開設を目指し、申請書類作成、授業内容の調整・体系化、成績評価等の準備を進める
- 2) 入学前教育の一環として実施するピアノレッスン等から学生の習熟レベルを把握し、2年間の学習成果を可視化および分析す。
- 2) 歴代のミュージカル作品のデータ整理をし、成果としてまとめる
2023年新作「かぐや姫」のシナリオ及び導入曲の制作
- 4) 附属幼稚園での「5 Minutes Concert」の再開を含め、園児を対象とした音楽教育、鑑賞教育の充実を目指す
- 5) 自然環境を活かした教育(大豆畑等)の継続を検討する

6. 根拠資料

- ・シラバス
- ・音楽関連 課題チェックシート
- ・授業レポート
- ・提出課題(創作作品など)
- ・52期生ミュージカル「人魚姫」シナリオ
- ・カワイピアノグレード取得状況・推移データ
- ・授業評価アンケート
- ・成績評価分布 他

